

---

# ファイ・トゥ・ザ・エンド

おおわさび

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファイ・トウ・ザ・エンド

### 【Nコード】

N6945M

### 【作者名】

おおわさび

### 【あらすじ】

『五神術』

それは五つの神から与えられたといわれている術のことであり、『炎神術』『水神術』『風神術』『雷神術』そして『地神術』である『極神術』の五つの術で構成されている。

『炎神術』はガハト家、『水神術』はメトティカ家、『風神術』はリスク家、『雷神術』はコルト家と家ごとに血脈で伝わっていて、『地神術』である『極神術』だけは武術として伝わっている。

そして、風神術の使い手であるクレット・リスクが軍の入隊試験

のために訪れた町に突然魔王が現れた。

それをきっかけにクレットは『夜神』リード・ツウベインなどの各国の実力者たち共に、魔王討伐の旅に出る……。

友達にはかなり人気の作品です

不定期更新ですがよろしくおねがいします!!

## 第序話 交渉

木材で作られたであろう家の中、二人の男が机に向かい合うように座っていた。

一人はまだ幼さが残る、二十歳にもなっていない、黒みがかった青い髪をした青年で、身長は170ぐらい。そして首からパイロット用のゴーグルを掛け、右腰にナイフ用のホルダーを付けていた。もう一人は、白髪が少し混じった黒髪で、三十代後半ぐらいの見た目の男、筋肉のせいか、がっちりとした体型をしており、身長は黒みがかった青い髪の青年より少し高いぐらいだった。

黒みがかった青い髪をした青年は、自分の髪を振り乱し額が机に付くぐらい頭を下げて、白髪が少し混じった黒髪の三十代後半ぐらいの男になにか許しを得ようとしているようだった。

「お願いだ！！ 行かせてくれ、オレの夢なんだあ！！」

「無理だ、分かっているだろクレット、まだお前を認めていない」

しかし三十代後半ぐらいの男は、冷たく吐き捨てるように要望を却下するだけだった。そこに少し呆れの意が見えるのは、この流れを何回も行っているからであろう。

「オヤジ！ オレだって強くなったんだよ！！」

それでもクレットと呼ばれた、黒みがかった青い髪の青年は諦めず、何度目かの頭下げを行った。

「……仕方がない、そこまで言うなら」

根負けしたように言った、オヤジと呼ばれた男は壁に掛けてあった、使い込まれた痕のある鞘に収まった剣を手を取った。

次の瞬間には、鞘から鈍く光る剣が生まれ、クレットに向けられていた。

「この私に勝てたら行かせてやってもいいぞ」

だがクレットは眉ひとつ動かさず、自分に向けられた剣先を軽く人差し指で横にずらして宣言した。

「フルボコにしてやるよ、オヤジ!!」

そうして二人は、大岩などが点在している、家の庭で向かい合った。

「どっからでもこい」

クレットのオヤジは、抜き身の剣を両手で持ち、軽く腰を下ろし構えた。

ハイス・ジユネラルド・クロス。

この名を先のラッコール戦争に出て知らない者などいないだろう。《血翼の悪魔》《戦場の鬼》《血の雨を降らす男》など彼をさす異名は数え切れ無いほどに多く、名門のジェネラルド家の出身でありながら傭兵として幼い頃から様々な戦いに身を投じ、数千数万を超える魔物を倒し、人にとつての『英雄』魔物にとつての『悪魔』その男こそクレットの父ハイス・リスクである。リスク家にクレットの母ジャスニカの入り婿として入ってからは戦場に参戦していないが、それでも白髪が少し増えただけで肉体的衰えはなく《血翼の悪魔》そのものである。

クレットはそのことを重々承知しているので、すぐに剣を抜いて馬鹿正直に斬り掛かろうとせず、ハイスの間合いから十分離れているのに一度後方に跳んで、更に間合いを開けてから、剣を鞘から抜き、構えた。

「さあ、全力でこい!!」

ハイスのその言葉通り、クレットは剣を空にかかげるように上げ、思いきし振り下ろした。

「【風神術 - 鎌融 - 】」  
かまいたち

すると振った剣から風の刃が発生し、ハイスに向かっていった。だがそれは軽く横に動くことだけで避けられた。その際、後方にあった大岩が何の抵抗もなく真つ二つになった。

「まだだあ！【風神術・鎌鼬・乱れ<sup>みだ</sup>】」  
避けられたと見るといenaや、クレットは連続して何度も剣を振った。

剣が振られる、その度に風の刃が生じていった。

マシンガンのように連続して放たれている風の刃だが、ハイスというひとつの目標に向かっていているわけではなく、とにかく辺り構わず『数撃ちや当たる方式』で放っているらしく、母ジャスニ力が庭の近くで家庭菜園として作っているトマトやらキュウリが、その被害として熟す前に切り落とされていった。

風の刃を避けていたハイスだが、これじゃラチがあかないと思い、避ける事を止め、力を込めて剣を地面に突き刺した。

アラガルト・コルテ  
「【冥王の咆哮】」

剣から溢れ出るばかりの衝撃波が発生して、放たれていた風の刃をすべて打ち消し、更にクレット自身も吹き飛ばした。

「グッ！！」

クレットは空中で一回転をし、地面に着地して、

「さすがだオヤジ【冥王<sup>アラガルト・コルテ</sup>の咆哮】なかなかいい技じゃないか」  
すぐに体勢を立て直したが、口元には血がうかんでいた。

ハイスはというと、衝撃波により大岩などを消し真っ平になった地面から剣を抜いて、元の構えに戻っていた。

しかし最初とは違う空気が、周りにあった。

「そつちも少しは本気でできてくれるらしいなあ！！」

クレットは手の甲で口元の血を拭い、剣を引き、一気に前に突いた。

「【風神術・矢】」

剣先から空気を圧縮した矢のようなものが放たれ、ハイスに向かっていった。

「また飛び道具か！」

少しあげつらうようにいい、ハイスは防御しようとしたが、  
「なに！？」

予想以上の強力な力であつたために驚愕し、一二歩後ろに押されてしまった。

「ハッ！！」

しかし、力を入れて一気に【矢】を打ち消した。

「それで」

その程度かと言おうとしたハイスだったが、最後まで言うことはできなかった。

【-矢-】との攻防の一瞬の間にクレットが間合いを詰めていて、ハイスの懐に入っていたのだ。

ハイスの反応が遅れてしまっているうちに、

「【風神術・走<sup>そう</sup>-】から、」

クレットは剣を逆手に持ち変え、間合いを詰めたスピードをそのままに全身を一旦沈め、

「【風神術・昇<sup>しょう</sup>-】！！」

一気にアッパーカットの要領で全身のバネを使って一陣の風と共に切り上げた。

「なっ、なめるなあ【悲<sup>トウール・キュレ</sup>しみの代償】！！！！」

だがハイスは切り上げてきているクレットに向かって、魔力により一回り二回り以上大きくなった剣で、全身を使つての横切りを放った。

「くそッ！！」

圧倒的な力により、クレットの【昇】は無理やり押さえ込まれ、更に再び後方にぶっ飛ばされた。

だがさつきとは違って、何とか受け身をするだけで地面に落ちた。

「なめんなよ！！」

すぐに立ち上がったものの全身にかなりのダメージがきているようだった。

「さすが、《血翼の悪魔》ってところか」

それでも強がりと思われてもおかしくないセリフを、クレットは

顔に笑みをうかべて言い、一息ついて剣を左腰の鞘に戻して、右腰のホルダーからナイフを数本取り出した。

「そう言えば、この技オヤジには見せてないよなああ!!」

そして取り出したナイフを一気に投擲した。とっつき

「【風神術・矢・】」

ナイフにさつきほどの【矢】が合わさり高速で放たれた。

だがナイフはハイスに向かっていかず、全くと言っていい程、見当違いの方向に飛んでいった。

「何をやっているのだ」

ハイスが呆れるように言ったが、それこそ見当違いで、  
「なっ?!」

と、すぐにハイスは驚きの声をあげることになった。

なぜならクレットが投擲したナイフが空中で突然、軌道を変えハイスに襲いかかっていったのだ。

「そして【風神術・流・】」

ハイスは向かってきたナイフを避けたが、避けられたナイフはすぐに軌道を変え再び襲いかかってくる。

「氣流を操っているのか!!」

次に剣で弾いたが、それでもナイフは軌道を変えて、何度でも襲いかかってくる。

「正解!」

クレットは、ホルスターから更に数本ナイフを取り出し【矢】と共に投擲した。

「邪魔だ!!」アラガルト・コルテ【冥王の咆哮】」

さつきほどと同じようにハイスが力を込めて剣を地面に突き刺すと、そこから衝撃波が発生して、空中にあったナイフを全て薙ぎ払った。

「それを待つてたんだよ!」アラガルト・コルテ【風神術・檻・】おり」

しかしクレットはハイスの【冥王の咆哮】こそを待ち望んでいた。クレットは手を前に突き出し、何かを握りつぶすように強く握った。



た。

その行動が命ずるように、ハイスを中心として周りの空気が一気に圧縮して、

「ヌッ！」

ハイスは仁王立ちをするような姿で固まってしまった。

アラガルト・コルテ

「【冥王の咆哮】は自分の動きを止めてやらないといけないし、モーションもデカイ。そのスキをねらってオレの【-檻-】決めてやったわけ」

クレットは固まってしまっているハイスに対して自慢げに言い。

そして、空いている方の手の平を広げると、そこに風が集まっていき一つの玉になった。

「これで終わりだあ！！【風神術 - 風玉 - 】【かぜたま】」

そして出来た【風玉】を放った。

「ここまで、出来るとはな……、私も本気でいかなとなああ！！」  
ハイスは身動きがとれないというのに本当にうれしそうに言って、そしてなんと「ハッ！！」と気合いを込めて【檻】を力任せに取っ払い。更に向かってきていた【風玉】を左手で握り潰すように消してしまった。

「あれ？」

クレットが度肝を抜かれ情けない声を出してしまっている間に、さつきとは逆にハイスが間合いを詰めて、クレットの懐に入った。

「喰らえ！！」

その時、何故かハイスは剣を持っている右手じゃなく、何も持っていない左手を突き出してきたのだが、その理由はすぐに分かった。  
「ヤバッ！」

クレットが焦りながらハイスが突き出してきた、左手を払おうと剣を横に振ると、

「なッ?!」

左手に触れた剣のところが消えてしまったのだ。

（このままじゃ、ヤバイ！）

と、クレットは反射的に感じ、重心を後ろに倒れ込むぐらゐに移して、一気に跳躍して、攻撃を避けた。

間合いを空けて、クレットは自分の剣を見て「マジかよ…」と呟いた。

なんと剣の中心辺りがキレイに丸く抉られるように消えていたのだ。

「初めて見たか『<sup>ハイスベル</sup>上級魔法』」

「おいおい……『<sup>ハイスベル</sup>上級魔法』ってマジかよ」

半ば呆れる様にクレットは呟いた。

魔法は難易度や効力威力毎に『<sup>イージスベル</sup>下級魔法』『<sup>スタンダードスベル</sup>普通魔法』『<sup>ハイス</sup>上級魔法』の三つにランク分けされている。

そして一応一番上の『<sup>ハイスベル</sup>上級魔法』は使えるものが限られる強力な魔法なのである。

「私が一番得意な『<sup>ハイスベル</sup>上級魔法』の【消魔の輝き】だ」

ハイスは右手の剣を鞘に戻し、左手の袖を肩まで捲った。

左腕には、もう肌が見えないほどの大量の魔法式が刻み込まれていて、文字一つ一つが青白く光っていた。

「魔法文字での補助つきかよ。ずりー。だけど、」

クレットは『<sup>ハイスベル</sup>上級魔法』をハイスが使ってきたのに、怖気づくどころか、逆に嬉しそうには笑った。

「おもしれえー、それでこそオレも本気以上の力が出せるってもんだー!!」

クレットはもう使えなくなった剣を鞘に戻し、言葉そのものに力を込めるように「【<sup>かみ</sup>風神術・神・】」と唱えた。

するとクレットを中心として風が巻き起こり、更に辺り一帯の風がクレットに集まっていき、背中に四枚の風の羽を作り出した。

「【風神術・神・】。それは風神術のリミッターを外し、神の力に近づける技」

そう言い、クレットは両手を前に出した。

「そして【<sup>ふうけん</sup>風神術・風剣・】」

クレットの周りで巻き起こっていた風が手に集まっていき、風の剣となり、それを構えた。

「……それでこそ、私の息子だ！……」

その姿を見てハイスは何かをぶちまけるように叫び、クレットに向かっていった。

「【風神術・巨矢・連・】」

そう唱えると、動いていないというのに先程の数倍はあろう【矢】がクレットの周りに現れて、ハイスに対して放たれていった。

「無駄だ！！」

しかし、ハイスが左手を振ると【巨矢】は触れるだけで消されていった。

「喰らえ！！」

ハイスの左手がクレットをとらえようとした瞬間、

「【風神術・柳・】からの【・楓・】」

ハイスの攻撃をクレットは風に揺れる柳の葉のように、力に逆らうことなくかわし、反撃しにくい左手の側に入り、風の剣で斬り掛かった。

「チツ！！」

ハイスは舌打ちをしながら無理やり体をひねり、左手でクレットの剣撃を打ち消した。

それを見てクレットは無理に連撃に繋げようとせず、すぐに上空に舞い上がり、そこから下方に【・巨矢・連・】を放った。

アラガルト・コルデ  
「【冥王の咆哮】」

ハイスが足で地面を思いきし踏むと、そこから衝撃波が発生し【巨矢】の軌道をずらした。

「全然その技、スキないじゃん！？　っていうか足でも出来るのかよその技！？」

「もちろん腕でも出来るぞ」

ハイスはクレットのところまで跳び上がり、左手を突き出した。

アラガルト・コルデ  
「【冥王の咆哮】」

突きだした左手から衝撃波が発生し、クレットを突き抜けた。

「ぐお！！」

衝撃によりクレットは地面に隕石のごとき勢いで鋭角に叩き付けられ、地面を直線上に削り取るように転がっていき、やっと止まった。

「この程度で終わってはいないんだろ？」

空中になんらかの手段で浮かんでいるハイスは地面の上で動かないクレットに言った。

「モチのロンだぜ、オヤジ」

その問に応えるようにクレットはゆっくりと立ち上がった。

あそこまで豪快にやられたというのに足下はふらついていないしケガもなく、ダメージはほとんど無いようだった。

「風で身を守っていなければ、ちよつとやばかったかもしれないな」  
体や服に付いた土を払い、風の剣を右手で下段に持ち、右足を一歩後ろに引いて構えた。

「【風神術 - 第二の構え・一竿いっかんの型 - 】。こいやオヤジ、次で終わらしてやるよ」

「それは同意だクレット」

ハイスは【消魔の輝き】の発動を止め、剣を抜いた。

そして剣は魔力により一回り二回り以上大きくなった。

「やはり剣で行かなくては、な？」

ハイスの鋭い視線がクレットをつらぬいた。

その視線にクレットは強く応える。

「いくぞクレット！！」

「こいや、おやじ！！」

ハイスは魔力により一回り二回り以上大きくなった剣を振り上げ、空中から降下しながら一気にクレットに突進し、

「【悲しみの代償】！！」

剣を振り下ろした。

「【風神剣術 - 一竿いっかん風月 - 】！！」

クレットの【一竿の構え】から繰り出された、下から掬い上げるような突きは振り下ろされているハイスの剣を捉え、

「なにっ！！！？」

上に大きく弾いた。

そしてそのまま、がら空きになったハイスに飛びかかり、地面に押し倒した。

「これで終了だな」

クレットはハイスの上に跨り、風の剣を首に突き立てた。

「……………ああ、俺の負けだ」

そう言つて、ハイスは降参の証に両手を上に上げた。

「よしよし」

クレットは満足そうに頷き、ハイスの上から降り、風の剣を消した。

「まさかここまで強くなっているとはな、昔はこれでも《英雄》とまで言われていたのだから」

ハイスの悔しそうに言いながら、立ち上がり服に付いた土を払った。

「しかし、これだったら十分一人前と認めてもいいだろう、母さんもこの実力だったら《第五十七代風神術正当継承者》と認めてくれるだろうしな」

と、のハイスの言葉に、

「ヨッシャ！これでオレも軍人に！！」

クレットは子どものように感情を露わにして、メチャクチャ喜んだ。

しかしそう長く喜びに浸っていられなかった。

「何やってんの！！！！」

突然、半径一キロぐらいには届きそうな女性の甲高い怒声が響いた。

「ヤバッ！！！！」

クレットとハイスが同時に怒声がした方を振り向くと、腰まで伸

びている青い髪を怒りのあまり逆立てて、顔を真っ赤にしている、二十代後半くらいの見た目の女性、クレットの母ジャスニカが立っていた。そして彼女の目にはクレット、ハイスの姿の他にクレットの【鎌鼬】のせいで切り落とされ、ハイスの【冥王の咆哮】アラガルト・コルデなどの攻撃の余波で潰されて元々の形が分からなくなるほどグチャグチャにペースト状になった、彼女が精一杯育ててきた家庭菜園のトマトやキュウリ等の野菜が映っていた。

「……………」  
クレットとハイスのどうすればいいか思考の沈黙。

「……………」  
ジャスニカの怒りの沈黙。

「……………」  
力の限り思考したが、結局、二人に残された道は一つだった。

「「ごめんNASAあああああい……………」」  
それから二人での超高速連続土下座での平謝りが始まった……………。

## 第序話 交渉（後書き）

ご感想お待ちしております。

けっこう直してみました

がんばれ自分……。

## 第一話 始まり

ある日の昼下がり、ビジ（都市の名前）の人が溢れ音が溢れる賑やかな駅に一つの魔動列車（魔力を燃料として動く列車）が着いた。列車から降りてきた様々な姿な人の中に、希望に胸を膨らます一人の青年がいた。

その青年は黒みがかった青い髪をして、パイロット用のゴーグルを首から掛け、右腰にホルダーを付け、左腰には真新しい一本の剣が差していて、右手にトートバッグを持っていた。

この黒みがかった青い髪をした青年の名は、クレット・リスク。軍人になる試験を受けるために、ビジに来たのだ。

モハネ国（この青年クレットが暮らしている国のこと）では軍人は憧れの職業であるがために、クレット以外にもたくさんの軍の試験を受けるであろう人たちが、魔動列車からおりていた。

「やっと着いたか……」

クレットは長旅で固まった関節を軽くほぐしながらそう呟き、駅に備え付けの大きな時計を見た。

（まだ時間はあるし、観光でもするか！）

そう考え、ビジの商店街へ駆けていった。

時を同じくして、身長130ぐらいの、金髪ミディアムヘアで白いローブを着た少年と、常夜を思わせる黒い長髪をして漆黒のロングコートで身を包み、右腰に一振りの刀を差している、二十代中盤ぐらいの身長180以上の男という、アンバランスな二人組が高速でビジへ向かって移動していた。

「まだかなりあるな、急ぐぞ」



黒い長髪の男はかなり焦燥するように、横に並んで移動している金髪ミディアムヘアの少年に言った

同じように移動すると一口に言っても、黒い長髪の男は走りで、金髪ミディアムヘアの少年は黄色く光る透明な板のような物に座って移動していた。

しかしどちらの移動スピードもとてつもなく速かった。

「そんなこと言われても、ボクこれでかなりマックススピードだし、それにこれ以上スピードを上げたら戦えなくなって『骨折り損のくたびれもうけ』になっちゃうよ」

金髪ミディアムヘアの少年の指摘が実際その通りだったらしく、黒い長髪の男は口を閉じた。

「焦るのは分かるけど、焦ったままだと何も救えないよ」

「……そうだな、そのとおりだな。焦ったままでアイツから何も救えるわけがなかったな。誰も救えないじゃ駄目だ、誰か救わないといけないんだ」

そして黒い長髪の男と金髪ミディアムヘアの少年はビジに向かって移動を続けた。

「うん、うん、本当にいい街だ」

両端に色とりどりの店が立ち並び商店街を、クレットは満足顔で歩いていて、手にはたくさんのお土産が入ったトートバックを持っていた。

「タッタラ、タラタラ」

ハナウタ混じりにリズムをきざまながら、上機嫌にスキップをしていたクレットだったが、

「タラリラ？」

何気なく目に入った時計の針が軍の試験開始6分前を指していた。

「…………ヤバイじゃん!!」

(観光が楽し過ぎて時間を忘れてた!!)

焦燥し、さっきまでの上機嫌の顔は消え、急いで試験が行われる軍の司令部に向かおうとした。

「ウツ？」

だがクレットは、何か何とも言えない違和感を感じ、つい足を止めてしまった。

(何だこの感じ?)

すぐに軽く辺りを見渡したが、違和感の正体はつかめず、すぐにその違和感も、元々なかったかのように消えてしまった。

「……気のせいかな? って、それどころじゃねえ!!」

少し不思議に思ったが、時間がないことを思い出し、クレットは走り出した。

クレットが軍の司令部の門を通った時、残りはたった2分で、門の前に立っていた二人組の門番の軍人からは「早くしないと遅刻だぞ」と豪快に笑われてしまった。

(クソ! 初っぱなから遅刻はねえよな)

と、考えていると後ろからさっき門番の笑い声がした。

「アンタも遅刻か!」

その声を聞き、何気なく後ろを振り向き、そしてそこに立っていた二十代後半ぐらいの青いコートを着た男が視界に入った瞬間、クレットは反射的に生存本能的に、いつの間にか飛び退いて腰から剣を抜いていた。

(な、何だよ、こいつ!?)

クレットは青いコートを着た男を見た瞬間感じた、いやそんな生半可の表現じゃない、骨の髄まで刷り込まれ刻み込まれた。

この男の圧倒的すぎる『恐怖』としか、描写表現することが許さ

れない力を。

「ほう、我が力を感じることが出来るやつがいたか」

青いコートを着た男は、そんなクレットの反応を見て、少し楽しそうに笑った。

「何やっているんだ、お前？」

何も分かっていない二人組の門番が、クレットの行動を見て怪訝そうな顔したが、

「もうすぐ試験が始まるぞ、いそ……」

すぐに門番の一人が呆れるように当たり前かのように、自然に急かすために青いコートを着た男の背中を軽く押そうとした。

「やめろ……！」

と、クレットは門番を止めるために叫ぼうとしたが、恐怖のあまり声にすることが出来ず酸素が足りない魚のように無様に口を震わせるだけだった。

そんなクレットを嘲笑うかのように、青いコートを着た男は何か邪魔な物を払うようにはなく、ただ軽く手を振った。

そして、最初からいなかったかのように、門番の一人が消えていった。

「なッ!？」

一瞬、クレットは目の前で何が起きたか理解することが出来なかった。

だが、次の瞬間いやでも青いコートを着た男がただ軽く手を振った。たったそれだけの行動で、一人の人間が何も残さず、何も余韻がなく一消滅（殺された）ということが無理やり理解させられた。

「てっ、てめえ……!!」

その事がもう一人の門番にも分かり、ただ怒りのまま仲間を殺した青いコートを着た男に腰のサーベルを抜き、斬り掛かった。

しかし、その行動のあまりにも安直すぎて滑稽と言わざるおえなかった。

「【久遠の闇】」

そう、青いコートを着た男が小さくなんの感情も込めず言うつと、それだけで門番の左胸のところが闇に包まれ、何もない虚無となった。

「へ……？」

門番の体はそのまま糸が切れた人形のようにゆっくりと、重力にしたがって倒れた。

（くそおー！）

クレットは体が恐怖により動かすことが出来ず、その光景を見ることしか、立ちつくすことしか出来ない自分に悪態を付いた。

「人間よ何も出来ないことを気に病むことはない。人間とは存来そのような物なのだから」

「なっ……」

いきなりの青いコートを着た男がクレットの心中を見透かしたような言葉をはいた。

その言葉に慰めの意はなく、ただ当たり前のことを言っているような口ぶり、今さっき二人の命をこの世から文字通り消した事など、全く気に留めてなかった。

心中を言い当てられたことにより、クレットの恐怖に支配された中に動揺が生まれた。

しかし、その動揺が良いほうに作用し、何とか虚勢を取り繕うことに成功し、

「お前はなんだ？」

目の前の青いコートを着た男に震える声で聞いた。

「我が『恐怖』を感じていながら『お前はなんだ』と問うか……」

中々に面白く素晴らしい。では、そんな貴様のために名乗ろうか」  
青いコートを着た男は、立ちつくしているクレットと向かい合い、堂々と誇るように名乗る、『恐怖』の名を。

「我は《魔王》フォルス・ジアーテ。人間を駆逐する者だ」  
フォルス・ジアーテ。

この名を知らぬ者などいないだろう、無数に存在する魔物達の頂点

に君臨する『魔王』 フォルス・ジア―テの名を。

その事はクレットも知っている、だからこそ疑問を持った。

(コイツ……魔物なのか?)

と、何か違うように感じた何か魔物とは。

だが、今のクレットはその事について思考することを許さなかった。

(今はそんな事より、こいつがほんとに『魔王』かどうかなんてこんな所にいるかどうか考えるより先に、この状況をどうするかを考える!!)

現実から目を背けようとした思考を無理やり戻し、目の前の敵に対応するためクレットは力の限り唱えた。

「【風神術 - 神 - ！】」

するとそれに応じるようにクレットを中心として風が巻き起こり、更に辺り一帯の風がクレットに集まっていき、背中に四枚の風の羽を作り出した。

「ほお、それは確か『五神術』の一つ『風神術』だったかな？」

背中に四枚の風の羽をつくったクレットを見て、フォルスは思い出すように言った。

『五神術』

それは五つの神から与えられたといわれている術のことであり、  
『炎神術』<sup>えんしんじゅつ</sup> 『水神術』<sup>すいしんじゅつ</sup> 『風神術』<sup>ふうしんじゅつ</sup> 『雷神術』<sup>らいしんじゅつ</sup> として『地神術』<sup>ちしんじゅつ</sup> である  
『極神術』<sup>きょくしんじゅつ</sup> の五つの術のことを言う。

『炎神術』はガハト家、『水神術』はメトティカ家、『風神術』はリスク家、『雷神術』はコルト家と家ごとに血脈で伝わっており、この四つの家を合わせて『四大名門貴族』と呼ばれていて『地神術』である『極神術』は武術として伝わっている。

「少しは暇を潰せるか」

そんなことを呟き、フォルスは自分の前に膨大な魔力を集約した黒く禍々しい玉をつくりだした。

「【殺意の結晶】」

そのまま軽く手を振ると、黒く禍々しい玉はクレットに向かって飛んでいった。

「【風神術・巨壁・】……」

それをクレットは下から吹き起こる風によってつくられる巨大な壁で、炸裂して起こった黒い爆炎ごと全て受け切った。しかし、（グッ！ ふざけんなよ！！ こっちは全くの手加減無し of 全力以上の力で守ったんだぞ！！ それなのにたった一発でたった一発でこれかよ……）

クレットは半ば自嘲気味に思った。

クレットの体はたった一発だけ、たった一発を受け切るだけで両脚にきて来て、両腕に来て、脳に来て、全身が痛んで痺れて限界で背中の【・神・】発動中の証である四枚の風の羽も消えてしまった。それでも、クレットは膝を地に着けなかった。

実力の差は明白で、無駄なあがきということは分かり切っていた、立とうが倒れようが変わりないということも分かっていた。

しかしそれでも、剣を杖代わりにして決して《魔王》フォルスの前で跪こうとしなかった。

「……その努力は賞賛に値過ぎるな。貴様の様な奴がいるとは、面白過ぎく素晴らし過ぎるな」

そんなことをフォルスが感慨深そうに言った。その時、

「何事か……」

後方から声がして振り向くと、そこには、異常に気付いたのか、司令部から大量の武装した軍人達と、試験を受けに来た者達が飛び出してきていて、こっちに向かってきていた。

クレットはそれが無駄だと分かっていた、『魔王』フォルス相手じゃ、ただいたずらに犠牲を増やすだけと分かっていた。

だからこそ来るなと叫びたかった、しかし今度は恐怖ではなく体が限界で言葉を発することさえ出来なかった。

（くそ、来るな！ 来るな！！ こっちに来るなあああ……！！）  
悲痛なまでのクレットの叫びが声になることはなく、軍人達と試験

を受けに来た者達は、そのままこちらに向かって走ってきた。

「……興を削ぎやがりて」

フォルスの冷たく吐き捨てる様な声が聞こえ。

さっきほどの【殺意の結晶】以上の膨大な魔力を感じたと同時に、クレットの目の前が爆炎に覆われた。

「【しんい瞋恚の炎】」

軍人39人 試験生28人 総勢67人の命は叫び声を上げる暇さえなく、服が焼け、武器が溶け、肉が焼け、血が沸騰し、骨が燃え、一瞬にしてこの世から蒸発した。

「あつ……………」

「コイツもついに入れておくか」

何とか保ってきた心が折れて、何も考えられなくなったクレットの横を、何かが通り過ぎた。

それが左胸をなくした門番の死体だったなどと、思考することはもう出来なかったし、どうでも良かった。

ただ一人分の焼ける匂いと音が増えただけだった。

「はあ、これで終わりか」

フォルスはクレットの前に立ち、手に現れた黒剣を振り上げた。

ダークネスソード

「【光壊し】折角だからな、貴様は我が手で我が顔を見ながら殺そう」

クレットにとどめを刺すため、フォルスは黒剣を振り下ろした。

クレットの体は限界で、心は折れていて、避けようとするのが二重の意味で不可能だった。

そのままだったらフォルスの黒剣がクレットを真つ二つにしていたら。

しかし、『ガキイイン』と金属同士が激しくぶつかり合う鈍い音がしただけで、フォルスの黒剣がクレットを真つ二つにすることはなかった。

「これ以上、貴様に殺させるわけにはいかない」

いつのまにか、クレットの前に一人の男が立っていて、手に持つ

た刀でフォルスの一撃を防いでいた。

「思ったより早かったが……遅かったな《夜神》<sup>やしん</sup>」

フォルスがクレットと合ったときよりも何十倍も何百倍も嬉しそうな顔をし、自分の剣を止めている男を見て言った。

その男、常夜を思わせる黒い長髪をして漆黒のロングコートで身を包み、右腰に一本の鞘を差している、二十代中盤ぐらいの身長180以上の男を見たとき。

クレットはフォルスと完全に完璧にベクトルが違い相対する『安心』『信頼』出来る圧倒的な力を感じた。

それはクレットの折れた心を、シヨック療法よろしく無理やり建て直らした。

そして戻った思考で、フォルスの自分と合ったときよりも何十倍も何百倍も嬉しそうな顔を見て、

（結局オレはこの人が来るまでの暇つぶしだったわけか）

と、思った。それはとても屈辱的な事なはずなのに『目の前のこの人の暇つぶし程度でも変わりになることが出来た』と何故か自然と誇らしい気持ちになった。

「ハア！！」

黒い長髪の男は力を込め、フォルスを後ろに弾き返した。

「はははっ！ さすがは《夜神》リードといったところか」

（リード……ってまさか『四方神』<sup>しほうしん</sup>のリード・ツウベイン！?!）

クレットはその黒い長髪の男の名前に聞き覚えがあった。

『四方神』

それは軍力が高いモハネ国の中でもトップの部隊。特別部隊『Angle』の更にトップ四人、それこそが『四方神』。そしてその『四方神』のトップに二十一歳という、あり得な過ぎて、前代未聞過ぎて、最年少就任記録を六十歳以上更新して登り詰め、名実ともにモハネ国のトップとなった男。

それこそが《夜神》リード・ツウベインなのである。

（そうか……そんな大物の暇つぶし程度でも変わりになれたからか



…そりや嬉しいわけだ)

クレットは納得し、氣と力が抜けて倒れそうになった。

「すまないなリスク遅れてしまつて」

そこを黒い長髪の男リードが支えてくれた。

クレットは何か感謝の言葉を言おうとしたが、心が戻っても体がいふ事をきかなかった。

クレットの体が限界だと察して、

「ミネ、リスクの治療を頼む」

そうリードが言つと身長130ぐらい金髪ミディウムヘアで白いローブを着た少年がそばに現れた。

「ボクの事置いていったくせに……」

ミネと呼ばれた金髪ミディウムヘアの少年は何か不服そうであったが、素早く肩から掛けていたポシエットから、魔法陣が描かれた小さな紙を取り出しクレットの額に付けて魔法を唱えた。

「かの者に少しばかりかの光の加護を【光の癒し(グアン・イーユアン)】」

すると、クレットを春の木漏れ日を思わせる光のモヤのような物が包み込んだ。

(光の回復魔法か。 すごい、どんどん体が楽になっていく)

クレットは自分の体が直っていくのを、文字通り身にしてみ感じた。

「後は任せたぞミネ……。 私は、」

リードはクレットをゆつくりと地面に下ろし、

「フォルスの相手をやる」

《魔王》フォルスをしっかりと見据えて、一振りの刀を構えた。

「『風神術使い』、《光族<sup>ひかりぞく</sup>》ミネ。そして《夜神<sup>よがみ</sup>》リードか……至極面白過ぎく素晴らし過ぎるな」

フォルスはホントに楽しそうな笑みを浮かべ、両手を前に突き出した。

「【光壊<sup>ひかりくわい</sup>し】」  
「<sup>ダークネスインドラ</sup>」

フォルスの手から、さっきの黒い剣を形作っていた力の右左一匹ずつ黒龍が現れて、リードに襲いかかった。

「【二つの心 Gemelos Corazon】」

素早くリードが唱えると二つの淡く光る巨大な剣が空から降ってきて、二匹の黒龍を貫いて消した。

ダークネスソード  
「【光壊し】」

自分の攻撃が失敗したと見た途端、一気にフォルスは間合いを詰めて、黒剣で横切りを放った。それをリードは後ろに下がって避けた。

フォルスは更に前に出ながら返しの刃で横切りを放ち、リードはしゃがんで避け、そこから下から上に切り上げた。フォルスは後ろにバク転して、リードの攻撃を避けた。

そして互いの武器が、二人の間で無数に交差した。

（レベルに差がありすぎだろ……）

ある程度回復したクレットは、リードと自分との格の違いを見せつけられた。

ハイスベル  
『上級魔法』を短縮詠唱で発動し、動きは速すぎて一度も目で捉えることが出来なかった。

（これが『四方神』トップの力が……『魔王』と互角に殺<sup>やり</sup>やっていやがる）

と、レットが思っていると、横から歌のような物が聞こえてきた。横を見ると、自分を助けてくれた少年ミネが、黄色く光る魔法陣の中心で両手を組み呪文を唱えていた。

「数多、多く光り輝くアムネよ ミネ・ナヨイの名の下にて命じる我が眼前の魔をその光で包み込み滅せよ」

そしてミネは両手を前に突きだし唱えた。

グアン・パオ  
「【光の抱き】」

黄色く光る魔法陣がフォルスのところまで移動し、天に届くような光の柱が出現した。

「無駄だ！」

だがフォルスが剣を振うと、それだけで光の柱は掻き消えてしまった。

しかしそれこそ、一瞬スキをつくる事こそ、ミネの目的だった刃の一筋の光が見えたかと思うと、フォルスの後ろでリードが刀を振り切った状態で背を向けるようにしていた。

「【無作むさいっせん一閃】」

そうリードが小さく呟くと、同時にフォルスの首から大量の血が噴き出した。

（ヨッシャ！！ 勝った！！！！）

と、クレットは思った。

だがすぐに噴き出す血は止まり。 傷も塞がってしまった。

「『夜神』リード、我はお前と戦いに来たわけではないのだ」

そしてフォルスは何事もなかったかのように、リードの方を振り向いて言った。

「何が言いたいんだ！！！！」

リードも振り向きながら、斬り掛かった。

「【光壊し】ダークネスシールド そう焦るものではない」

リードの攻撃をフォルスは黒剣や黒龍と同じ力の黒盾で防いだ。

「我は宣戦布告しにきたただけだ」

「宣戦布告だと！！？」

リードは黒盾を砕こうと力を込めたが、ビクとしなかった。

「そうだ、人間で我とまともに戦えたのは貴様ぐらいのものだ。

そこで我は貴様を全力で駆逐することにした」

そう言い、フォルスが手を振ると、リードは簡単に吹き飛ばされてしまった。

そして、クレットとミネの方を向き、

「強かに足掻いて我に刃向かってこい人間」

と自分の左胸を親指で指さして挑発するように言い、フォルスの体は黒いモヤに包まれていった。

「逃がすか！！フォルス！！！！」

吹き飛ばされたリードは、すぐにフォルスに斬り掛かったが、刀は何の手ごたえもない黒いモヤを斬るだけだった……。

第一話 始まり 終了

## 第一話 始まり（後書き）

感想が頂ければうれしいです！  
やる気が出ます！！！！

## 第二話 決意

フォルスが去った後、クレットはリード達が借りていた宿屋の一室に招かれていた。

「最初に自己紹介をしてよう。私はモハネ国軍特別部隊『Angle』所属、リード・ツウベインだ」

「ボクは魔術協会、第八支部第二戦闘部隊、部隊長、ミネ・ナヨイだよ」

二人の名乗りに答えるようクレットも名乗り返した。

「俺は《風神術第五十七代正当継承者》クレット・リスクです」

「それで、クレット体のほうは大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。それで俺に何の用があるのですか？」

そう聞くとリードはゆっくり言った。

「単刀直入に言わせてもらおうよ。クレット、私たちの仲間に入らないか？」

「仲間にですか……」

繰り返すように呟くその言葉には、驚愕と言うより『なぜ？』という疑問に溢れていた。

「そうだ。私は《魔王》フォルスを倒すために一緒に戦ってくれ  
る仲間を集めているのだ。そして、その中にクレット、キミの力  
が必要なんだ」

「お言葉は嬉しいのですが、俺……」

クレットの脳裏によぎるのは先程の戦い。

目の前で、人が殺されているのに何も出来ない自分。  
立ちつくすことしかできない自分。

そんな、無力な自分が、この人の役に立てるわけがない。

そう考え、断ろうと口を開いた。

「俺、その話おことわ……」

「そう言っただけで逃げない気？」

突然、ミネが蔑むように言った。

「《魔王》が怖いから逃げるんだ」

「そ、そんな分けじゃねえよ。俺はただ、俺なんかが役に立つわけないと思って……」

そうクレットが言うと、ミネは大仰にため息をついた。

「あのさあ……。役に立つ立たないってのはねー、本人が決めることじゃなくて、他の人が決めることなんだよ。リードはお前の事が必要、役に立つって言ったんだよ。だから、お前は役に立つ人間なんだよ。自分を過小評価するなよ、みつともないな」

「……………」

その言葉に心の中のなにかが吹っ切れた感じがした。

（そうだよ、俺は何考えていたんだよ！あのリードさんが俺のことを必要だと言ってくれたのに！それに、この人だったら、自分だけじゃ守れないたくさんの人が守れそうな気がするのに！それなのにそれなのに俺は何迷ってたんだよ！！）

クレットはリードの目を見てはつきりと言った。

「リードさん！俺を仲間に入れてください！！！」

そんなクレットを見て少し笑いながら、

「勿論だとも」

と、リードは言った。

「まっ、足を引っぱらないでね扇風機」

「せ、扇風機って俺のことか！？」

ミネは行きなりふざけたアダ名を言い、クレットは身を乗り出した。

「そうだけど？」

そんなクレットの反応を気にすることなく、ミネは平然と答えた。  
「傷を直してくれたのは感謝しているが……。さつきからお前、

俺を馬鹿にしていやがるな」

「そうだけど？」

「……………」

無言で、クレットは剣に手を掛けた。

「おい！ クレット落ち着け！ それにミネもちよつかいを掛けるな」

そこに、素早くリードが仲裁に入った。

「……すみません」

「リードが言うなら……」

そう言った二人だったが、お互いに睨み合ったままであった。

「……早速だがこれからの行程を確認しよう」

リードは仕方がなく、そのまま話を進めることにして、腰のポケットから地図を取り出し机の上に広げた。

「まず、ここから南東にあるルファナに行き、更にそこからサニに向かう」

「Second defense wall（第二の防御壁）を越えるのか！！」

クレットはその道のりを見て驚いた。

モハネ国は—First defense wall（第一の防御壁）、—Second defense wall（第二の防御壁）、—Last defense wall（最後の防御壁）の三つの巨大な壁により囲まれ、守られているのだ。そして、Last、Second、Firstと行くほどに様々な意味で危険になっていくのだ。

「なんだ扇風機、—Second defense wall（第二の防御壁）も越えたことないんだ、もしかして怖いのか？」

早速バカにするように言うので、クレットはムキになって言い返した。

「ちげえわ！！ ただ少し驚いただけだわ、豆電球！」

「ま、豆電球だと……」

お返しとばかりに放ったその一言が、感に障ったらしく、ミネの額に血管が浮き上がった。

「へえ、なに扇風機？ そんなに塵にしてもらいたいんだ？」



「ハッ！ やれるもんなら、やってみろよ豆電球」

そう言って、クレットは剣を鞘から抜き。

ミネは魔法陣が描かれた小さな紙を取り出し魔法を唱える体勢をとった。

「……………」

二人の間に一触即発の空気が流れる。

「二人とも落ち着け！！」

そんな二人の頭に、リードのゲンコツが入った。

「とにかく、ルファナである人と会い、サニで他の仲間と一度合流するということだ、分かったな」

リードは頭を抑えてうずくまっている二人に向かい捲し立てるように言った。

「それはいいんですけど……一つ聞いてもいいですか？」

クレットは頭をさすりながら思い出したように聞いた。

「う？ なんだ？ 言ってみろ」

行きなりの質問に少し驚きながらも、リードは快く了承した。

「あの、『魔王』フォルスって何者なんですか？」

「……………その質問はただ単に『魔物の王』と答えて欲しいわけではないな……クレットも気付いていたのか」

その質問をしたことにリードは少し驚き、そして困ったように頬を掻いた。

「ええ、なにか魔物とは違う感じがして」

「ハア……良い機会だし教えておいても良いか」

そう一度ため息をつき、覚悟を決めたようにクレットの質問に答えた。

「『魔王』フォルスは『魔人』だ」

「『魔人』ってなんですか？」

聞き覚えがないワードが出てきたので、すぐに聞いた。

「『魔人』というのは、人と魔物の融合体のことを指すんだ」

「人と魔物の融合体！？ そんな全く逆な物を一緒にするようない

とが出来るわけがないでしょ!!」

その言葉にありえないとばかりに、クレットは大声を上げた。

「この扇風機！ リードに向かってその口の利き方なんだよ!!」

「落ちてけミネ」

話に横やりを入れてきたミネを黙らせるため、もう一度ゲンコツがふるわれ、ミネは「いつつたい〜」と再びうずくまった。

「クレットの言いたいことは分かるが、これは事実だ。 人と魔物の良い所取りをした存在、それが『魔人』だ。 しかも『魔人』は《魔王》フォルスだけではなく数多くいるのが分かっている、もしかしたらその中に《魔王》クラスの力を持った奴もいるかもしれない」

そこでリードは腰に差している刀の鐔に手を掛けた。

「そうだとしても、私は皆を守るため前に、進むことを諦めないのだがな」

そう言って、リードは立ち上がり、クレットに右手を差し出した。「改めて言わせてもらう。 クレット、一緒に戦ってはくれないか？」

（あんなやつが他にもいるかもしれない、それは本当に恐ろしいけど。 この人とだったら何とか出来そうな気がするな……）

そんなことをぼんやりと思いながら、

「もちろんです」

クレットはその手を、なんの迷いもなく自然に取っていた。

## 第二話 決意（後書き）

ご感想などをお待ちしております。

……もっとなんばろう

### 第三話 列車で

「扇風機、おまえのポツキーくれ」

「オイ！ 俺のあだ名は『扇風機』で決定かよ！ だつたらおまえは豆電球だ！！ それと、ポツトくれ」

「豆電球って言うな！ ポツトの中のチョコなしならやるよ！」

「それじゃあ、ただの筒状のクツキーじゃねえか！ ふざけんな！！」

「扇風機にはお似合いだよ」

「なんだとお！！」

「二人とも列車の中では静かにしろ……」

今、クレット達はカモリに向かう列車に乗車していた。

クレットとミネの二人は、互いにお菓子の取り合いをしていて、そんな二人を、リードは優雅に本を読みながら宥めていた。

「ケツ！ 扇風機のポツキー、チョコかよ。普通イチゴだろ」

と、ミネはクレットから奪ったポツキーを、カジカジとかじりながら言い。

「ハア！？ 意味わかんねえーし！ ポツキーはチョコに決まっているだろーが、バカか？」

対してクレットも、ミネから奪ったポツト食べながら言った。

「分かってないな、扇風機。ポツキーはイチゴが一番おいしいんだよ」

「分かってないのはお前だ、豆電球！ チョコは王道、イチゴは外道だわ！！」

ミネの物わかりが悪い生徒に教える教師のような諭すように言う口調にカチンときたらしく、クレットは激しく突っ掛かった。

「……あまり周りに迷惑掛けるなよ」

リードは熱いポツキー討論をする二人を宥めるのを諦め、読書に専念し始めた。

列車内にはクレット達以外にもそれなりに人がいて、それぞれ楽しそうに友達の話や行き先の話などをしていた。

「『チョコは王道、イチゴは外道』ってなに言ってるのー？ チョコの甘さは一辺倒ですぐ飽きる、ポッキーは絶対にイチゴだね」

「チョコの甘さは一辺倒じゃないわ！ 嘗めてんのか、ガキ！」

二人のポッキー討論がとどまることを知らず、ヒートアップしようとしていると、突然、列車が何かにぶつかったように揺れて、急停車した。

「何だ！？」

騒然とする列車内で、リードは直ぐに状況を掴もうと窓から列車の外を見ようとしたが、

「シャー！！！」

窓ごと壁を突き破って紫色の人ぐらいの大きさをしたサソリ型の魔物ディサンクが現れ襲いかかってきた。

しかし、リードは全く動揺することなく、バックステップをしながら刀で一刀両断した。

「『『キヤー！！！！』』」

そうしている間にも列車の壁を突き破り、矢継ぎ早にディサンクが乗り込んできた。

「『無賃乗車はお断りですよ！！』」

クレットとミネは同時に叫びながら、ディサンクを一体ずつ倒した。

「『ぱくるな（よ）！！』』」

「『それはこっちのセリフだ（よ）！！』』」

完璧にハモって互いの顔を睨みつける二人に一抹の不安を感じながらも、

「ミネ、クレット！ ここは任せた！」

そう言いリードはディサンクが突き破って出来た壁の穴を通って、素早く列車の外に出た。

そして外の風景を見たリードは「くそ！」と苦々しく吐き捨てた。

ただの徒広い緑色の草原だったところは、いまや気味悪く蠢くデ  
イサンク達により紫色に染められていた。

（列車には魔物避けの魔法が施してある。それにここはディサン  
ク達の住処ではないはず、ということとは、  
）

リードが思考をめぐらしていると、

「ギャハハハハ、こんちはザコども！！」

目の前に緑色の人間型の魔物が現れた。

「オレ様は《蠍屋》<sup>さそりや</sup> スコープス！！ よろしくつてな！！」

と、下品な声でソイツは笑いながら名乗った。

「これは貴様の仕業か！！」

リードがスコープスを斬ろうとしたが、

「俺とやりたちゃ、このディサンクを全部倒すことだな！！ まあ  
無理だがな、ギャハハハ！！」

スコープス嘲るように大声で笑いながら、ディサンクの集団の後  
ろまで跳んでいった。

それと同時に大量のディサンクが一斉に襲いかかってきた。

「邪魔だ！」

リードは襲いかかってきたディサンク達を一刀の元で切り捨てた。

「どんだけいるんだよこいつら」

「知るか！！」

一方クレットとミネも、リードとは反対側の草原に出て、ディサ  
ンク達と戦っていた。

他の乗客達も戦っているようだが、一体一体がそれなりに強く、  
更になんか数が多いため苦戦を強いられていた。

「光よ 敵を貫け【光の針】<sup>グアン・ジュン</sup>」

そう唱えると、ミネの周りに大量の光の針が現れ、ディサンク達  
に向かっていき貫いていった。

しかしそれでもディサンクの数が減る気配は一行になかった。

「キリがねえなあ!!」

クレットは襲いかかってきたディサンクを剣の振り下ろしで斬り、群れの中に跳び込んだ。

「……シャーーー!!」

ディサンクたちが襲いかかってくるよりも速く、クレットは一回転させるように剣を振った。

「【風神術 - 旋風<sup>せんふう</sup> -】」

風の刃がクレットを中心に円状に広がっていき、ディサンク達を薙ぎ払っていった。

「やるね〜扇風機　けどぼくも負けないよ!!」

ミネはポシエットから魔法陣が描かれた小さな紙を取り出し、自分の足下に落とした。

すると、紙に描かれていた魔法陣が足下に黄色く光って展開した。

「浄化の光よ　魔の物達に降り注ぎ　この地を浄めよ【光<sup>グァン</sup>の雨<sup>・ユイ</sup>】」  
魔法陣が更に一層光り出し、その光が空に昇っていったかと思うと、光の雨がディサンクの群れに降り注いでいった。

「……シャーーー!!!!」

光の雨により消滅していくディサンクの絶叫に混ざって、

「止めるー!!!!　俺もいるー!!!!」

クレットの叫び声もついでに聞こえてきた。

「ハッ!!」

最後のディサンク達をリードは一刀で薙ぎ払った。

「スゲーー……俺たち何もすることがなかった」

他の乗客達は目を見開いて啞然とするしかなかった。

草原を埋め尽くさんばかりにいたディサンクの群れは、リード一人の手により全て動かぬ亡骸とかしていた。

「これで後はオマエだけだ、スコープス」

軽く見渡しただけでも数百はいただろうディサルクを数分で全滅させたというのに、リードは息ひとつ乱していなかった。

「ギャハハハハハ！！！！ 人間にしてはやるじゃねかよ！！ オレ様も本気でいってやるよ！！！！」

そう言うのと、スコープスの体が盛り上がって膨張していき、ディサルクの十数倍はあろう、緑色で八つの毒針を持つサソリ型の魔物になった。

「ギャハハハ！ 喰らって、さっさと終わって死ね！！ 【八つの毒針（エイト ポイズン プリック）】！！」

八つの毒針が、八つの方向から一斉にリードに襲いかかった。

しかしリードの姿が消え、八つの毒針は一つもリードに触れることなく地面に突き刺さっただけだった。

「なッ！？」

スコープス驚いていると、八つの毒針が切断され、背後でリードが刀についた体液を振って払い、立っていた。

「遅い……」

「く、くそがああ！！」

スコープスが、振り返って二本のハサミで攻撃しようとしたが、  
「ハアー！？」

振り返ろうとするのをリードが片手で制した。

「燃え尽きる【熱き炎 Caliente Fuego】」

そう短く唱えると、触れている所から一気に燃え上がってゆき、直ぐにスコープスを包み込んだ。

「さよならだ」

そのままスコープスは苦しむ暇もなく、燃え尽きた。



「ふう〜つかれたよ〜リード〜」

「それはこっちのセリフだ！！俺まで巻き込みやがって！！」

「チエ！そのまま、消えれば良かったのに……」

「今なんて言った豆電球！！」

「何も言っていないよね〜リード〜」

「あまりケンカをするな。……それとミネは私から降りろ」

「つかれたからヤダー」

クレットとリードは草原を自分の足で歩いていたが、ミネはリードの上に肩車してもらおうようにしていた。

クレット達の活躍により列車の乗客にけが人はいなかったが、列車自体にはかなりのダメージを受けてしまい運行不能になってしまった。

そのため仕方がなく、徒歩でカモリに向かっているのだ。

「あの、今回の襲撃みたいな事は良くあるんですか？」

一通りミネと漫才のような掛け合いをしたクレットはリードに聞いた。

「ああ、列車の襲撃事件、自体はあまり例はないが、小さな村などの魔物の襲撃報告は数多くあり、軍でも対処仕切れていないのが実状だな。軍は常に人員不足だよ」

「それだったら軍の試験なんかせずに来た人みんな合格すれば良くありませんか？」

クレットは軍の試験の合格率が平均37%以下だったことを思い出しながら質問した。

その質問にリードは困ったように苦笑しながら答えた。

「そうはいかないんだよ。まあ、あんまり良い言葉ではないが、この言葉を引用させてもらうよ。『集団戦闘において最も恐ろしいのは、一体の強大な敵ではなく、一人の愚かな仲間である』他にもいろいろと表現方法はあるけど、これが一番分かり易いかな」

「…………？それはいったいどういう意味ですか？」

「扇風機そんなことも分かんないの？」

言葉の意味を理解出来なかったクレットに、ミネが物理的にも精神的にも上から物を言ってきた。

「簡単に説明してあげると、チームワークや役割分担などが大切な集団戦闘でね、指揮系統を混乱させるだけの兵はいらないって事だよ。更に簡単に説明してあげると『足手まといはいらない』ってことかな」

ミネの説明に付け加えるようにリードは言う。

「つまり私が言いたいことは、ただいたずらに人員を増やしても戦力の上昇どころか、戦力の低下を招く事態になるだけということだ。わざわざ試験を受けに来てくれた人には申し訳ないが、厳正に可否を決めなければならいんだ」

「なるほど」

納得したクレットにリードは更に続けた。

「人員不足といっても、ここ周辺の国々はそこまで深刻な問題ではないんだ。……いやかなり深刻だが、すこし離れた国と比べると程度が違いすぎる。他の国はもっと深刻で酷いことになっている」

「そう、ですか……」

（やっぱりどうにかしないといけないんだな……）

クレットは前を見ながらそう思った。

時を同じくして、クレット達から遠く離れた、岩と砂しかない荒れた荒野。

そこに体長30メートルあろう、カメ型の魔物ターゲスがいた。

その周りを小さな影が動き回ったり飛び跳ねたりしていて、ターゲスは炎を吐いたりしていたが、完全に翻弄されているようだった。

「グワアアアアー!!」

ターゲスは雄叫びを上げ、その巨体で押しつぶそうとしたが、影はそれを避けようとせず、逆に下に潜り込み、腹を蹴り上げた。その衝撃により、30メートルある巨体が軽々と宙に舞い上がった。

そして次の瞬間には、ターゲスの体に大量の風穴が空き、土煙を上げながら地面に落ちた。

「思ったより時間がかかってしまったわね」

と言う影の声は、少し甲高い、まだ成人を迎えていない少女の声であった。

なんと30メートルもある巨体の魔物を易々と倒した影の正体は、クレットと同じぐらいの歳であるう、翠色の髪をした、赤いジャケットを着た少女であった。

「ううん。さてと、急いでサニに向かわないかね」

軽く体を伸ばし、少女は小さく呟いた。

### 第三話 列車で 終了

### 第三話 列車で（後書き）

なかなか小説を書く暇が取れません……

出来るだけ早く更新していこうと思います

序話と第一話を少し変えました

できたら見てください

ご感想ご指摘ご質問あったらどんどん下さい  
作者のやる気が五割増しです！！

#### 第四話 修練？

夜の闇が一層深くなる森の中、唯一の光源である焚き火を囲むようにして、クレット達は座っていた。

「しっかし、今日大変でしたねー」

クレットは焚き火の上でおいしそうに煮立っているトマトスープを見て、涎がたれるのを我慢しながら、そう言った。

列車が利用できなくなり移動が徒歩であったので、体が石のコウモリ型の魔物ストーンバットや、木に擬態して人に襲いかかるツリーターetc...と様々なやつと戦うことになり、かなり腹ぺこになったのだ。

「今日みたいなのは当たり前だし。 リスク家のお坊ちゃんは何も知らないんだねー」

ミネはバカにするように鼻で笑った。

「リスクとか言うんじゃないよ、俺そう呼ばれんの嫌いなんだよ。

……っていうか、」

そう言うと、クレットはミネを睨み付けた。

「てめえは何食ってたんだよ！」

睨み付けられた、ミネは平然とカロリーメイトを両手で持って可愛らしくかじっていた。

「うっ？ カロリーメイトチーズ味だけど？」

「いや、そういうことを聞いたわけではないし、味なんてどうでもいいわ！ 飯、リードさんが作ってくれているだろうが！ 飯の前に食うなよ！」

「別に良いじゃん好きなんだし。 ……それに扇風機も一度食べれば分かるよ……」

「はっ？ どういうこ」

意味が分かんなかったので、クレットは聞こうとしたが、  
「よし、できたぞ」

鍋を掻き回していたリードの声により阻まれた。

「あつ、ありがとうございます」

すこしおっかなびっくりといった感じに震える手で、クレットはお椀に入れてもらったトマトスープを受け取り、

「それじゃ頂きますっ!」

勢いよく口に掻き込んだ。

「ウツ!？」

しかし舌に触れた瞬間に、猛烈な違和感に気付かざるえなかった。

（あ…あ、甘あああいつ!!! なんだこれえ!? トマト本来の甘さとかじゃなくて、確実に砂糖とかの甘味料による甘さだ!

しかも小さじ一杯とかいったレベルじゃなくて、大さじ数十杯とかいったレベルだ! というか口内が痛い! マジで痛い!!!）

刹那的な速さでクレットの思考が巡っていると、

『どう? すごいでしょう、リードの料理』

と、ミネが苦笑しながら囁いてきた。

『てめえ! 分かってたからカロリーメイト(チーズ味)を食べてたのか?!』

なんとか激甘スープを飲み込んだクレットの口調は強かったが、

ミネと同じ声量だった。

『結構長く一緒に旅しているからね。 まあ、最初に食べたときは

ヤバかったよ……』

ミネは哀愁深い表情をして、どこか遠くを見ながら呟いた。

『もしかして、リードさんって味覚おかしい?』

そう質問するとミネは首を横に振りながら否定した。

『逆に、リードは味覚だけで水に含まれている不純物の種類と量を正確に分かるから』

『いや、それは逆におかしいだろ!』

反射的にクレットはつつこんだが、何か思うところがあって、縊るような気持ちで聞いた。

『じゃあ……もしかして、これってリードさんの好み?』

そうでなくて欲しいというクレットの願いは届くことなく。

『……そうだよ……』

ミネはとても悲しそうな顔をして頷いた。

（それじゃあ、不味いとか食えないとか言えないじゃん！ リードさんの好みを否定するような勇氣はないし……）

と、考えていると、一興にスプーンを進めないことを疑問に思っただのか、

「あれ、なんでクレット食わないのだ？ もしかして……不味いのか？」

とリードはなんか悲しそうな顔をして聞いてきた。

「いえ！ 不味く何かありません！」

クレットは演技初心者な役者がするようなぎこちない笑顔で取り繕うように早口で言い、一気に激甘スープを口に掻き込んだ。

（くそっお！！ まさか甘みがここまでの辛さを構成することが出来るとは！ だけど、ここで負けるわけにはいかないんだ！！）

無我夢中に高速起動する機械のようにスプーンを動かし、お椀の中を空にした時クレットの目は生気を無くし、視線は宙を彷徨っていた。

『戦士だ……ボクでも半分までしか無理だったのに』

ミネはクレットを尊敬と憐れみの目で見つめた。

（さ、さすがにこれ以上はやばい。ここでごちそうさまと言はなければ、オレの命が……）

クレットは命の危機を強く感じ、

「ごちそうさま」

言おうとしたが、無常にも腹から空腹を告げる音が、静かな森の中に鳴り響いた。

（お、オレのハラのバツカ野郎おおおお！！）

「まだ減ってるじゃないか、遠慮しなくてもいいんだぞ」

そう言っってリードはクレットのお椀に大量の試練<sup>スープ</sup>を注ぎ込んだ。

・・・約二十分後・・・

結局クレットは危険<sup>スリプ</sup>物体を三杯に飲むことになり、物言えぬ体になっっていた。

「アーメン……」

ミネは胸の前で十字を切り、力の限り戦った戦士に黙祷を捧げた。  
「クレット、君のことは二日ぐらい忘れないよ、二日ぐらいは君の勇姿を伝えてあげるよ」

「死んでねえし！！それにみじけえよ！！」

叫びながらクレットが跳ね起きた。

「だ、大丈夫？」

さすがに今回ばかりはミネは心配をして声を掛けた。

「大丈夫じゃねーよ。くそ、頭がいてえし、舌が痺れてやがる」

頭をさすりながらクレットはボヤいた。

だが、試練はまだ終わっていないかった。

「まだデザートもあるぞ」

そう言ってリードはクレットの前にケーキを置いた。

（スリプでこれじゃ甘いケーキの甘さは致死量じゃね……？）

「……トドメだね」

目の前に置かれた物体に呆然としているクレットそばでミネが小さく呟いた。

夜も深くなり三人は眠りに入っていた。

ミネは寝袋にくるまり静かに寝息を立てていて、白目で気絶しているクレットには毛布が掛けられていた。

リードも木にもたれかかり眠っていたが、一人、目を覚まし立て掛けていた刀を持ち、静かに森の奥に入ってしまった。

しばらく森の奥に進んでいると、リードは突然足を止め振り向い



た。

「寝込みを襲おうとしてくるとはな、出てこい魔人」

その言葉に応えるように、木の陰から短髪の三十代後半ぐらいの男が現れた。

「さすがに《夜神》相手に奇襲は浅はかだったかな」

男は気味が悪い笑みを浮かべ、

「まあ奇襲が無理なら真っ向から打ち砕くだけだな」

そう言つと、なんの変哲もなかった男の腕が変容していき、無骨で禍々しい巨大な斧となった。

「……………」

リードは静かに刀を抜き構えた。

「ウオオオオオオオ！！」

男は解き放たれた猛獣のような雄叫びを上げ、先に攻撃した方が勝ちとばかりに、斧を振り上げながらリードに飛び掛かった。

「はっ！！」

上段から放たれる重力も加えられた強力な一撃を、リードは一切動揺せず避けおうとせず、刀を横に振るい真っ向から斧を打ち砕いた。  
「えっ……………ええええ！？」

驚愕の表情を浮かべる男。

それに対しリードは、

「すまないね、逆に打ち砕いてしまったよ」

と、平坦な口調で言い。

もうどう対応しようもない男に対し、刀を返しの刃を連続で振るつた。

「おんりえさん【厭離穢斬】」

リードの刀が鞘に収められたときには、男の姿はなかった。

第四話 修練？ 終了

#### 第四話 修練？（後書き）

更新スピードを上げなければ！

感想、ご指摘、感想、ご評価いただければ  
作者のやる気はウナギ登りです！！

## 第五話 三十星帝 導入部分

「この先セナナ村……。セナナ村ってなに？」  
道に立ててあつた看板を見ながらミネは言った。

「セナナ村。人口二百人ほどの村で、主産業は栄養価が高い土地柄から、野菜などの農業関係。出来るだけ自然に任せるその栽培方法から人気が高く。かなり今活気づいている村だ」

「へえ、そうなんですか」

リードの説明に相づちを打ちながらもクレットは心の中では、  
（よっしゃー！！ まともなやつが食べるかもしれない！！）  
と歡喜打ち震えていた。

しかし、そううまくいくはずがなかった。

「セナナ村って農業で活気づいているはずじゃなかったっけ……？」

村に着いたミネは村の様子を見て啞然とした。

村の人たちは見るからにやつれて、氣力を無くしたように道やらに転がったり壁にもたれていたりしていた。

そしてまたれている壁でさえボロボロで崩れそうだった。

「なにがあつたんだ……？」

そうクレットが呟いていると、

「それはのぉ」

後ろから突然しゃがれた声がした。

「「うわア！！」」

クレットとミネが驚いて振り返ると、ミネよりも更に背が小さな杖を持ったおばあちゃんと腰に剣を携えた村の青年が立っていた。  
「それはなんですか？」

リードは取り乱すことなく振り返り、すこし屈んでおばあちゃんに優しく聞いた。

「それはのお、旅の者よ。 実は数ヶ月前から『Grab』とかいう魔物たちが度々村にきてのお、食べ物奪っていくのだよお」

と、独特のイントネーションでおばあちゃんは応えた。

「それに奴らめちゃくちゃ強いんだよ！ 俺たちじゃ全く敵わなくて……。 何人もあいつらに殺された」

村の青年は、自分の無力さを悔やむように唇を噛みしめて言った。  
「軍の方には連絡はしたの？」

ミネが聞くと村の青年は首を横に振った。

「連絡したけど、軍にあいつらに対抗できるほどの人員を派遣する余裕がないらしく、まだ来ていないんだ……」

そう言い俯く村の青年。

『だってさ、どうするリード？』

ミネは顔を合わせ小声でリードに聞いた。

『どうするって？ どうにかするに決まっているだろ』

静かにリードは腰に差した刀に手を添えた。

『そうこなくちゃね』

ミネはその答えに満足するように頷き、おばあちゃんの方を向き言った。

「おばあちゃん、それだったら僕たちに任せてよ」

「任せると言ってもあいつらはかなり強いぞ」

「そうですよ旅の方を危険に合わせるわけにはいきません！」

「大丈夫だよ！ ねえリード？」

「リード？」

ミネの提案に難色見せる村の青年だったが、どこかで聞いたようなと頭を傾かせた。

「申し遅れました。 私はモハネ国軍特別部隊『Angie』所属。  
リード・ツウベインと言うものです」

リードは優雅に礼をし、自己紹介をした。

その自己紹介に村の青年は大きく驚いた。

「国軍の特別部隊！？それにリード・ツウベインって、あの『夜神』リード！！？」

「はいそうです。こちらの方に用があつて立ち寄らせて頂きました」

『夜神』リードという軍のビクネームだと聞き、村の青年は嬉しそうな表情をしたが、すぐに困ったような顔に変わった。

「『夜神』リードさんがやって頂くのは嬉しいのですが……。私たちにはそれに値する報酬というものが」

「もちろん、そんなものはいりません」

村の青年が皆まで言う前にリードは制した。

「軍人が国民を救うこと当たり前です。それに、」

そこでリードは突然、頭を深々と下げた。

「助けに来るのが遅くなってすみませんでした。私たちがもっと速く来ていれば」

「あ、頭を上げになってくださいリードさん」

青年はリードが頭を下げたことに困惑するように顔の前で小刻みに手を振った。

そしてクレット、リード、ミネの三人は魔物集団『Grab』との戦いが決まったのである。

その後『Grab』達と戦うためにクレット達は武器の手入れを行っていた。

「敵の構成はどうなんですか？」

クレットは剣を振って動作の確認をしながらリードに聞いた。

「相手戦力を知ることが大切なことだな。一応村の人に聞いてみたが、イノシシとオオカミとオオカマとドラゴンと赤髪の五体らしい」

刀の手入れをしながらリードは平然と答えた。

「……途中おかしな奴がいませんでした？ オカマって……」

「さあな、それについては詳しく聞いていないな」

クレットがなんとも微妙な顔をして聞くが、リードは全く気にしていないように刀の手入れを続けた。

「オカマ……。 どういうことだ？」

だがクレットは気になるようで、頭を抱えて思考の海におぼれていた。

それからしばらくして、 村の人たちが集まっている前に『Grab』達が現れた。

「ブヒヒヒヒ、早く食いもんを出すブヒ」

と、普通のより四倍ぐらい大きな黄色のイノシシのような魔物。

「出さないとどうなるか分かっているだろ？」

と、血よりも深い赤い髪をした二十代ぐらいの男性のような姿をした人型の魔物。

「ギャースー！」

と、翼がなく青い鱗を持つ、見上げるほどの大きさをしたドラゴン。

「面倒だな、さっさと殺せばいいだろ」

と、茶色の毛並みをして、腕と足が太い二本足で立っているオオカミのような魔物。

「それはガマンよ」

と、ピンク色の髪で、がっちりとした体型三十代ぐらいであろう男性の姿をした体をけけばしいお世辞でも趣味が良いとは言えない服で身を包んだ、人型の魔物。

この五体で『Grab』は構成されているようだった。

『……本当にオカマいるな』

クレットはしみじみと小さく呟いた。

『実はボクもちよつと気にはなっていたんだけど……、魔物にも性別ってあるのかな?』

不思議がるようにミネも呟いた。

『今はそれどころじゃないだろ。　というより静かにしろ……』

リードは心底呆れるように呟いた。

「早く出すブヒー!!」

黄色イノシシが村人達に強く迫る。

怯える村人たちの前に、先ほどのおばあちゃんが出てきて力の限り叫んだ。

「もうお前らにやるものなどないわ!!!!」

「………食ってやるブヒ」

不快感しか起こさせないような気持ち悪い笑みを浮かべ、黄色イノシシは村人たちに向かって突進した。

「今だ!!」

リードのその声を合図にそばに隠れていた、クレット達が一気に飛びだした。

「なっ!!?」

傍観体勢に入っていた他のG r a p達は慌てて戦闘準備をした。

「なんだブヒー!!」

黄色イノシシは急停止をして振り返った。

「【風神術 竜巻】!!」

クレットが剣を大きく横に振るうと、G r a p達に向かって大きな竜巻が起きた。

「ブヒッ!!?」「クッ!!」「ギャース!!」「くそ!!」「まあッ

」

それに巻き込まれないためにG r a p達はそれぞれの方向に避けた。

「私は赤髪とドラゴンと戦う」

リードは赤髪とドラゴンのを追いかける。



「じゃー、僕はオオカミを」

ミネはオオカミのほうへ行き。

「それじゃー、俺はイノシシとオオカミと戦うよ。……って俺の相手なんだよ!？」

クレットはイノシシとオオカミの方へ跳んでいった。

第五話 セナナ村 終了

## 第五話 三十星帝 導入部分（後書き）

書き終えた小説データが吹っ飛んだ……

今回学んだ教訓

データのバックアップは小まめにとること

ここテストに、いつか出ます

ご感想、ご指摘、ご評価頂けたら作者のやる気二倍ほど、

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6945m/>

---

ファイ・トゥ・ザ・エンド

2011年6月13日21時55分発行